

興福寺一乗院跡出土の 葡萄文硯

はじめに ここに紹介する資料は、2000年度に実施した平城第317次調査で出土したものである。調査地は、奈良市登大路町にある興福寺一乗院の跡地である。旧宸殿の南面で検出した大型土坑SK7801より出土した。この土坑は、寛永19年(1642)の火災にともなう塵芥処理のためのものと考えられている。調査当時、大量の瓦に混じって、暗紫色の破片が目につき、しかも葡萄葉の彫刻があることから、周辺を精査し小碎片も含め採集した。しかし、精巧な彫刻という特徴にもかかわらず、これが何であるのかはしばらく不明であった。昨夏、宮本佐知子氏の紹介文に接し、この破片が朝鮮半島北部涓原産の石材をもちいた朝鮮王朝時代(1392~1910)の石硯であり、日月硯という特徴的な形制をもつものであることが判明した。

涓原硯について 涓原石は、朝鮮半島北部慈江道の鴨緑江左岸で産出する粘板岩である。性質や色調により花草石、紫石、青石などと称され、朝鮮王朝時代、藍浦石とともに硯の材料として多用された。

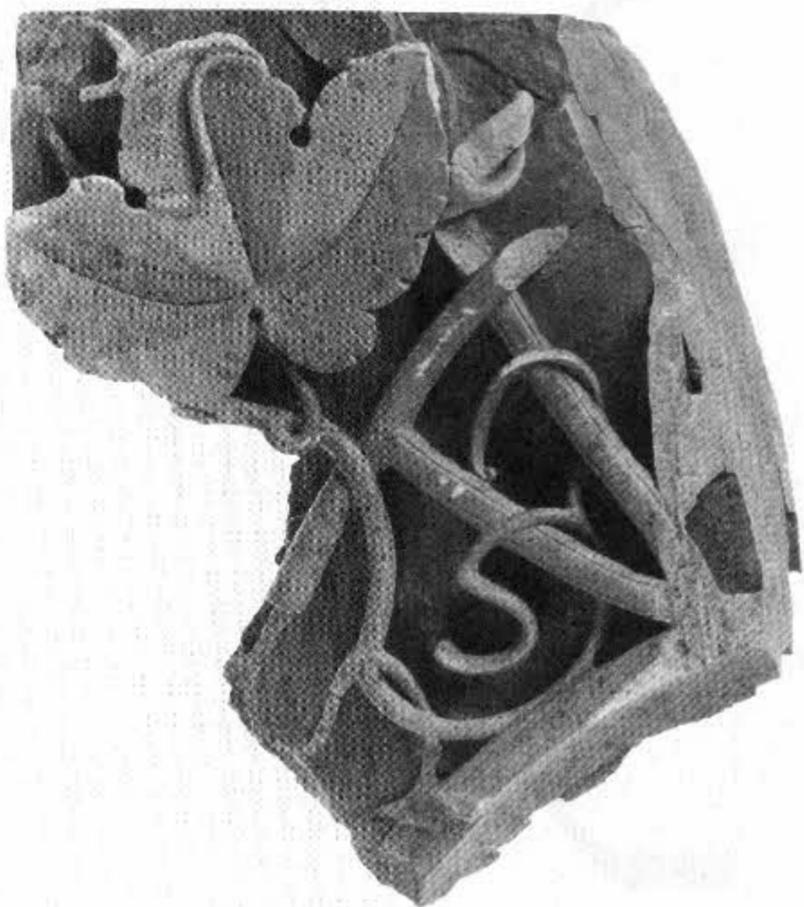


図39 興福寺一乗院跡出土葡萄文硯

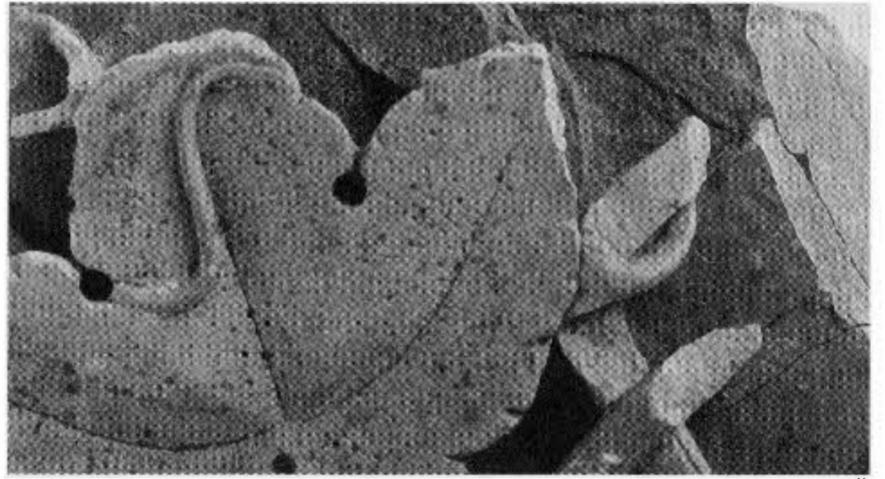


図40 地文部分(藤手状雲霞文、1.5倍)

涓原石をもちいた装飾硯は、長方形の硯体に、円形で日を表現した墨堂と、三日月形で月を表現した墨池を組み合わせて中央に配す「日月硯」という形制と(図41参照)、その周囲を立体的な陽刻表現で埋め尽くす意匠に特徴がある。緑白色の層と紫色の層が互層をなすことから、白色の層に文様を彫込み、紫色の層を地とすることもおこなわれた。文様は、本例のような葡萄文と、松鶴・梅竹文などに大きく分けられる。葡萄は子供を多く授かる象徴であり、猿などと組み合わせる例がみられる。後者は、十長生(太陽・水・松・鶴・亀・鹿・不老草の7種に、山・雲・月・石・竹のうち3種を加えて不老長生を象徴)、あるいは四君子(菊・竹・梅・蘭)、歳寒三友(松・竹・梅)等のモチーフの組み合わせである。図録等により全形を知り得た日月硯11例についてみると、硯体の長幅比はほぼ5:3で、長さ20~30cmのものが多い。長さ39cmにおよぶものもあり、全体に大型である。今回知り得た範囲では、国内に4例の出土と、徳川美術館(愛知県)、高麗美術館(京都府)、渡辺美術館(鳥取県)に所蔵品がある。

観察と復原 資料は直角をなす隅部の破片で、現存最大長9.0cm(図39)。裏面は剥離しているが、文様部をのぞく最大厚1.6cm。幅4mmほどの縁と曲面をなす墨池の一部をのこす。文様の彫出しは、墨池の縁上端とほぼ同じ高さで約7mm。地は水平に削られており線刻による藤手状の雲霞文で埋める(図40)。文様は、葡萄の葉と茎に巻きひげがからみつく様子を表している。3裂の葉には葉脈と葉脈に直交する多数の細線が刻まれており、切込みの付け根に径2mm程の小円孔を穿つことが特徴である。また、葉上にも細かな多数の孔が認められる。茎は上面に2条の沈線を刻み稜を表現している。

涓原硯のなかには徳川美術館蔵品のように、硯体の中央に墨堂と墨池を同心円状につくるものもあるが、文様部の幅からみると本資料は日月硯であろう。葡萄文硯では葉が下に向くものが多いことなど、なお課題を残すものの、むかって左上隅部の破片と考えておきたい。以上

の点をふまえ、おおよそ長さ33cm、幅21.5cmに復原することができる。

日本における出土例 前述のように、これまでに4例の出土例が知られている。

①大坂城下町跡 AZ87-5次調査(大阪市高麗橋1丁目)

東横堀川の西、慶長3年(1598)に開発された城下町(船場)の北東部に位置する。豊臣後期の遺構面(6層)で検出した土坑SK628と、大坂冬の陣(1614)の焼土層である第5層とから同一個体の小片5点が出土。葡萄文日月硯で、厚さ2.1cm、長さ26cm以上、幅18cmに復原される。葡萄葉を周囲に配し、巻きひげの表現もある。葉には小円孔がみられる。線刻による青海波を地文とする。

②大坂城下町跡 OJ95-4次調査(大阪市南本町2丁目)

唐物町通に面した大坂城下町の南部に位置する。大坂冬の陣の焼土層である第5層より出土。梅花文日月硯の上端の破片で、幅14.2cm、厚さ2.1cm。梅花、雲、山を浮彫りにする。白色層と紫色層の彫分けが明瞭である。梅花には5つの小円孔を穿つ。なお、破損後あらたに長方形の墨池が彫り込まれている。

③堺環濠都市遺跡 SKT263地点(大阪府堺市甲斐町東)

南庄惣鎮守である開口神社の南に位置する。同神社の神宮寺である念仏寺の境内地に推定される。大坂夏の陣(1615)で罹災した庭園をともなう礎石建物(客殿)付近の焼土層より出土。梅花文日月硯の破片で、長さ12cmほど。梅樹、梅花および雲を浮彫りにする。梅花には5つの小円孔を穿つ。蕨手状雲霞文の線刻を地文とする。

④平安京左京北辺四坊(京都市上京区京都御苑)

京都御苑内の北東部、御所の東に位置する。近世には公卿衆の屋敷町(公家町)が形成された。宅地中央で検出した穴蔵E355より出土。穴蔵内からは、17世紀から18世紀にかけての遺物が出土し、多くは天明大火(1788)にともなう塵芥で占められている。完形にちかい長生文日月硯で、長さ27cm、幅16.5cm、厚さ2.2cm(図41)。右上には日輪あるいは月輪、2羽の飛翔する鶴と雲、山を表し、蕨手状雲霞文の線刻を地文とする。右側には竹、左下は松と山を浮彫りにし、いずれも青海波の線刻を地文とする。

小 結 現状での出土例は、京・大坂・奈良に集中し、17世紀前半までに入手されたものが多い。少数例ではあるが、浮彫りにおける特徴的な小円孔のありかたや、地



図41 平安京出土渭原硯 1:3(財)京都市埋蔵文化財研究所蔵)

文に蕨手状の雲霞文と青海波があることなど、製作にかかわるいくつかの視点を見出すことができる。

今後、共伴遺物も含めた出土遺跡の性格、および史料的な検討をふまえて、入手あるいは所有の背景などについても考察を深めていく必要がある。

資料調査にあたり、宮本佐知子氏、岩宮隆司氏、岩宮未地子氏には多くの御配慮とご教示をいただいた。なお、図41は(財)京都市埋蔵文化財研究所より提供を受けたものである。

(次山 淳)

参考文献

- 飯島 茂1935『硯墨新語』雄山閣。
- 菊竹淳一・吉田宏志編1999『世界美術全集 東洋編』11、朝鮮王朝、小学館。
- 北畠雙耳・北畠五鼎1998『硯の文化誌』里文出版。
- 国立中央博物館1992『朝鮮時代文房諸具』。
- (財)大阪市文化財協会2004『大坂城下町跡Ⅱ』。
- (財)京都市埋蔵文化財研究所2004『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊。
- (財)高麗美術館2003『高麗美術館藏品目録』。
- (財)渡辺美術館2002『伝寛永帝御物渭原端溪「日月硯」渡来ルーツ等調査報告書』。
- 堺市教育委員会2004『堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告-SKT263・甲斐町東2丁目-』堺市文化財調査概要報告第103冊。
- 徳川美術館1988『文房具』徳川美術館藏品抄4。
- 奈文研2001「一乗院の調査-第317・321次」『紀要2001』。
- 北海道立近代美術館他編2001『朝鮮王朝の美』北海道新聞社。
- 宮本佐知子2004「朝鮮名産硯」『葦火』第111号、(財)大阪市文化財協会。
- 李東州編1987『韓国美術』3、李朝美術、講談社。